

審査員
藤江 和子(藤江和子アトリエ)
藤村 龍至(東京藝術大学美術学部建築科准教授/RFA)
吉里 裕也(SPEAC/R不動産代表)
吉村 靖孝(早稲田大学教授/吉村靖孝建築設計事務所)

メッセージ

藤江 和子

(藤江和子アトリエ)

建築士は、あらゆる社会の問題に絡む職能であるといえ、ますます複雑になっていく現代社会の中での、「これからの建築士」を、昨年に引き続き選考をとおして思考を深めたいと思います。

AIが浸透し産業革命とさえ言われている昨今ですが、建築の分野ではハードとソフトの未成熟でアンバランスな状況が、色々な歪みを出させている要因に思えることがしばしばあります。将来を見据えた先見性のある活動が大事である一方、置き忘れられそうに思える問題点、つまり、建築するという現実に表出している問題点である。現代ならではのテクノロジーを駆使したマイクロにもマクロにも収縮幅が大きく柔軟性の高い意識と技術クオリティーを持って足元を固めていくことは、将来において根本的な崩壊を招かないためには大事なのではなからうか。不足する労働力や技術者不足、技術力の低下を回復するために、建築士自身が、あるいは建築士が結束して参加提言できることはないものだろうか。また、高齢者や子供、身体不自由者へのまなざしは、行政や教育の分野、市民社会一体となったコラボレーションの姿勢が必須であると考えます。建築士がコネクターとなり小さいけれど地道で緻密な活動や領域を超えた多様な協働活動などが提示されて、社会を動かす力になる機会になれば意義あることと思います。

藤村 龍至

(東京藝術大学美術学部建築科准教授/RFA)

1970年から2020年までの50年間は近代化の初期段階に成立した「都市」が、都心部に超高層のオフィスビル群を建て、郊外に大量の住宅団地群を建て、あいだを大容量の交通ネットワークが結び人々が大きく移動する「大都市」に脱皮していく過程でした。特に東京は高速鉄道ネットワークによって日本中から人が集まる一大拠点となり、日本列島は東京とそれ以外の地方都市に大きく再編成されました。

1995年以後、わが国では各自にコンピュータ端末が行き渡らせ、郊外に大規模データセンター群が建て、あいだを大容量の通信ネットワークが結びデータが大きく移動する「超都市 Hyper Village」が25年かけて準備されつつあります。そこでは人々が集まらず、バラバラな場所にいたまま仕事をすることができる社会が予言されていましたが、新型コロナの感染拡大は「大都市」を強制的に終了させ、「超都市」を強制的に始動させました。

2045年くらいまでに完成し、2070年くらいにピークを迎えるであろう「超都市」のあり方を予測し、「超都市」の時代の建築を示すことがこれからの建築士の役割になりそうです。「都市」の時代(1920-1970)にはル・コルビュジエが、「大都市」の時代(1970-2020)にはレム・コールハースがそうした役割を果たしていました。

あなたがなぜそれに取り組むのか、なぜそこで取り組むのか、なぜそれは建築士でなければならないのか。節目の年の「これからの建築士」賞だから、取り組みの独自性だけでなく、これからの時代を見据えて自らの取り組みの歴史性、革新性を大いに語っていただければと思います。

吉里 裕也

(SPEAC/R不動産代表)

料理に例えると、一口で昇天するようなもの凄いの料理を創りたいと思って建築士を志した。今はそんな思いをちょっと持ちつつも、大衆食堂のように地元で愛される存在もよいな一と思っている。日常に寄り添いつつも遠くてもわざわざ食べに行きたくなる店、そんな相反する要素を統合するのに試行錯誤しながら活動している。

価値観もルールも日本の社会そのものが大きく変換する今、建築士に求められていることも大きく変換する時代だと思う。僕は建築を学び、社会との接点をもとめてディベロッパーで開発し、R不動産を立ち上げた。それらと並行して建築士としての活動も行っている。

そんな中で、いつも意識していることは「潜在的な課題」を見つけ出すことだ。それを建築的な手法と不動産やメディアといったそれ以外の手法を組み合わせて解決することを目指している。

これらからの建築士は、単に図面を書くだけでなく、課題を抽出し、解決策を共有し、実行し、社会に実装できる可能性を持っている人だと思う。

『社会の状況によって求められる職能も変わってくるはずです。』

第一回目を受賞させて頂いた時、そうコメントしました。新しいスタンダードを生み出すような、そんな建築士の可能性が広がるキッカケとなる取り組みに出会えることを期待しています。

吉村 靖孝

(早稲田大学教授/吉村靖孝建築設計事務所)

「これからの建築士」賞は、「これからの+建築士」を顕彰する賞である。しかしながら個人的には「これからの建築+士」にこだわって審査させていただきたい。わたしは、建築士の職能・職域の拡大こそが「これからの建築士」であるという短絡的な結論にはやや懐疑的で、むしろ「これからの建築」をつくるという目的に向かって邁進していれば、建築士の姿は自ずと更新されると思うのだ。もうひとつ私見を述べるのが許されるなら、わたしは、「建築家」と「建築士」を完全に同一のものと見做していることを宣言しておきたい。日本の資格制度は特殊だが、時代や国により職能の内容が異なるのは当然であるから、図面を引く専門家というアルベルティの定義に照らして、建築士に別の訳語を充てる理由は見当たらない。建築士も建築家もアーキテクトである。その意味で、日本のローカルな状況をあぶり出すだけでなく、全世界の建築家像を更新するような応募を期待する。この原稿を執筆中の3月現在、COVID-19が全世界共通の敵になり、クラスター化(=分節と集合)を旨とする近代施設の機能不全が明らかになっている。「これからの建築」に対する期待がますます高まっている。